



家仲燕切図名

二

遠  
2508  
10-2



遠  
2508  
卷10-2

義仲勲功圖會前編卷之三

目錄

為義贈初衣鎧義朝并教訓日圖

新院方敗軍義朝殊死

信西入道義朝の願を拒圖

崇徳院於松山配所崩御

大乘經書字の圖

信賴義朝乱逆殺信西入道

清盛父子熊野より京師へ地上圖

由乃圖會前編卷之三目錄

長田長致執義朝主從

志田六郎忠死

悪源太義平伏殊

義平大言清盛を罵國

義平恐靈拔殺難波三郎

木曾義仲勲功圖會前編卷之二

為義贈鑑義朝并教訓條

浪速 山珪士信考訂

六條廷尉為義と老煉の人の深くなりし事ありて内裏より度々召まきたる所勞と偽りて辞退し新院の御招死ふも應ぜざるに院使権頭実清が智弁小鏡付られ止事を不得院春一速小大將軍の職を辞退せしめと思惟し其約の端をも護せざる以前おのひも寄むとニケ乃莊を賜り上北面の思命を蒙り刺へ鴉丸の宝劍を下されしを兼ての思安相違し今更御辞退の上より心かたうむるに新院の御味方小屬し多るに借時勢を考ふるに此度の合戦新院の御利運千小のつも有下しと思れむ去る夜乃夢の下のいは是彼ありの廻せむ我身の宿運を盡せ死時節至未せざるかと覺期し暗小即黨小命トく重代の鑑り裡産衣としるが持せむ内裏の御味方小森とくあま子息



下野守義朝の許遣一且文成りつ今般新院不慮の御企ありく世の中  
 の強を出来ぬ原は皆女院信西が奸悪より起るしとて新院子より道  
 を守り玉つと仙洞登霞う程ゆりまされぬ振小干才を動りあす天  
 理小合せ玉つと人望ゆり背たむりされぬ方小二ツの御勝利有登りとも  
 ありんれど為義天眼通ハ得られぬも預トも其勝敗を察するがの敷度の  
 御招たを固く辞まなすり小重た院命を希ふが御答ト上り非礼也  
 くの儀小より忝向の上辞退せまへし浅くゆりありひりり百河殿ハあ  
 りまろ小院小へり謀殺させぬひりりや我院泰もろと其も厚た  
 院命かひ小伊庭吉柳ニケの莊を賜上北面さぐりの院宣うと為  
 丸の靈劍をりも下賜りぬ是我御辞退トと道を断り御謀小く  
 為義が身小しりりニケの莊も名劍も身を亡ふぬた築ける物を家の  
 譽よ身乃面目よりと羨されぬるもあらぬなり。遮莫是も定ゆる業小や

去ぬる夜の夢小重代つ鎧太刀旋風ハ八方散乱一行傍なくあしとん  
 けろも身乃亡ふぬた前表けろもまを維をう恨を維をう咎むば死原来  
 義小依り捨る命ハ毫毛トりも暁しつ弓前も身乃なひりり若く杜  
 かる人小然かり方ろりのを。てや我士旬小余り老の身乃無道小  
 もあき院の御頼小憊下戰場小臨と討死せんと武士の本意あくはむ  
 褥の上あく病死まろとよりハ逞小勝り棄て稀をろ老木搦も再び花  
 咲心地とまろとれ二且の義小引き思愛の又子兄弟思ハさる小敵々の  
 色を頭一鍬を磨た鏢を削るど浅猿をま。や是も世の不肖武士  
 身小ハ琢した例ゆりあろど弓矢もろ身も名を惜む新院方小又  
 もあり弟もありあんど言甲斐を死を思ふと只君忠乃為を重んじ又  
 生首もろ二心死を頭ハせとろも私思義をかり見遁一まろ  
 他人小討せたる生疎盡未未ま勤當ま。我のや頼されまろ

勅刀圖會前



為義子息  
義朝へ  
産衣の鎧を  
贈る因

勅刀圖會前



君の御為に叶はぬまじも死力を盡し汝をも孫をも討取らざらば一  
 門又子暗の戰場をれを家乃先例不任せ産衣の鎧源氏の太郎より  
 者着るべしをれど汝も贈りよるなり。是を著しし諸人の目を非せらる  
 と許の高名を顕せよ生前の功をなせし此外あり。多くく未煉の  
 行跡をせしれいかに寂細々と書きたりやぞ遣はるる。実八幡殿の  
 宿を稟する程ありく勇ましくゆききり。義朝も此書残らん  
 落洞し。緘小義朝が又中在とふ。武士も又々々者ハ尤斯と有る  
 々々々々々。躬も筆残らん。書きたる。御教訓の旨一々肝銘と忘るま  
 々々々々。此度の一乱ハ君と新院も御兄弟ゆききりせし。其余の人々  
 皆又子兄弟敵味方と引別せしれ。殊不暗々ハ戰場へ普通の鎧と  
 著しし。出陣せし。本意なきとかりし。家重代ハ鎧を賜る。難有さ  
 よ。義朝武運甲斐なく今般の軍陣没し。九泉の下ゆく大恩

以謝しなる也。現世あり敵々の中をれ。恭向し。思謝仕し。ここの  
 緒人の議論し。ろろろ。い。意不任せ。又あも。以以後。使者乃。往及を  
 断り。相おさ。使者ハ。數多の引出物。せ。文を持せ。既。抑  
 以産衣の鎧。と。原七竜。の。鎧かり。ハ。幡太郎。義家初陣の時。天  
 子より。彼け。被下。吉例の鎧なり。義家其時ハ源家の嫡男。まじ  
 緒人源太の。と。稱し。ハ。七竜を改。漁太が産衣。と。名付。ね。が。ふ  
 嘉例。芽出。と。れ。戎衣。な。れ。む。代々源氏。の。太郎。と。者。是。を。著。し。し。例  
 と。な。り。此。故。不。為。義。敵。味。方。と。隔。る。中。な。ら。ゆ。先。例。を。違。へ。義。朝。が  
 許。送。ま。さ。な。さ。る。彼。唐。土。の。樊。會。母。の。衣。を。著。し。し。戰。場。不。臨。比  
 類。な。れ。勲。功。を。顯。し。し。や。總。か。る。女。の。衣。を。著。し。し。斯。う。了。況。や。重。代  
 の。重。兼。成。贈。り。し。意。さ。る。受。し。子。の。心。何。許。嬉。し。く。も。さ。り  
 由。有。せ。と。傳。へ。人。毎。小。袖。を。あ。け。ぬ。と。な。り。り。

新院方敗軍義朝誅文條

却鏡内裡方（かたがは）新院御謀叛（しんいんごみまうはん）の御催（ごまひ）一明白（あきら）なれむ。左大将公教卿（さだまさのり）藤原相光頼公（ふじのら）古院（ふるいん）の御遺誠（ごいしん）を八条（やちやう）馬九（うま）なる美福門院（みふくもんいん）の御針（ごはり）より中下（なかつげ）の拜見（はいけん）あるも、この共兵乱（ともへいらん）を知召（しりま）するもや種々（しゆしゆ）の御遺誠（ごいしん）の上内裡（かみいり）へ召（ま）するも、たれ武士（ぶし）の名を紀（き）し置（お）せむいぬ。其輩（そのたぐひ）も、下野守（しもののり）義朝陸奥判官（よしかのむつ）義安（よしか）安藝判官（あきの）基盛（もとむね）周防判官（すうぼう）季實（せみ）隱岐判官（いんぎ）維繁（いひ）平判官（へい）實俊（み）新藤判官（しんとう）經（つね）亦（また）なり。茲（こゝ）も安藝守（あきの）清盛（よしみ）平氏（へいぢ）の棟梁（とうりやう）として一門（いっもん）類乗（るいじやう）も多（おほ）く勝（か）ましく智勇（ちゆうゆう）鋭（えい）く、殊（こと）も勇勢（ゆうせい）の者（もの）なれむ。第一（だいいち）小紀（こき）にたれむ。ゆゑに、其義（そのぎ）なれむ。新院（しんいん）の二宮（にのみや）重仁（しげの）親王（しん）、故刑部卿（こけいぶ）忠盛（ただむね）の兼君（かねきみ）も、さうしてせむいぬ。清盛（よしみ）と御乳人（ごにゅうにん）子（こ）の御心（ごこころ）をかせむ。御遺誠（ごいしん）小池（こいけ）にむしと、たれと、たれも女院（にょいん）ハ好智（こうち）逞（たけな）し、死人（しにん）なれむ。烈卿（れつしやう）小向（こむか）に、やまやまや、さうして世（よ）の乱（らん）ハ、兵一人（へいひとり）と、さうして味方（あじかた）小得（ことく）より、たれも、清盛（よしみ）の武士（ぶし）を、いふ御遺誠（ごいしん）小紀（こき）にむしと、さうして

新院（しんいん）の御味方（ごあじかた）させむ。禍（わざ）の基（もと）なり。只清盛（よしみ）も御遺誠（ごいしん）の第一（だいいち）小紀（こき）にむしと、偽（いつはり）りて招（ま）たれむ。新院（しんいん）方（かた）ハ御頼（ごたの）なくとも、清盛（よしみ）も、たれハ一番（いちばん）小池（こいけ）参（ま）りて、油断（ゆだん）して在（あ）りて、必定（ひつてい）なり。其間（そのま）ハ此方（こゝ）より、随（ま）今（いま）小頼（こたの）も、たれハ彼人（か）味方（あじかた）ハ、参（ま）りて、中（な）と、さうして、人々（ひと）実（ま）も、さうして、右女（みぎめ）并（なら）維方（い）を、勅使（ちやくし）として、清盛（よしみ）を招（ま）たれむ。此時（このとき）安藝守（あきの）清盛（よしみ）、白河殿（しろがわ）御謀叛（ごみまうはん）の色（いろ）、表（あ）へ、むしと、たれハ、小新院（こしんいん）方（かた）ハ、参（ま）りて、其心（そのこころ）構（か）むる所（ところ）ハ、勅使（ちやくし）右女（みぎめ）并（なら）維方（い）へ、来（き）ありて、故（ゆゑ）々（ごと）ハ、清盛（よしみ）大（おほ）の心（こころ）迷（ま）い、奈（な）何（なに）せんと、猶豫（うごち）するを、子息（こし）重盛（しげむね）大（おほ）の、小辣（こ）め、さうして、曰（い）夫（その）無道（むどう）を捨（す）て、右道（みぎみち）小就（こ）て、人倫（にんりん）の道（みち）ゆゑ、ハ、新院（しんいん）御心（ごこころ）な、さうして、室位（むろゐ）を、さうして、せむいぬ。皇子（みこ）も、當今（たうけい）小位（こゐ）成（なり）起（た）られ、たれハ、御爵（ごしやく）憤（ふ）と、御理（ごり）なれ、も、只（ただ）天命（てんめい）の飯（い）せ、さうして、覚（さ）り、たれハ、仙洞（せんどう）山（やま）明（あ）御（ご）させむいぬ。御棺（ごくわん）も、乾（かわ）さうして、無名（むな）の軍（い）を、好（この）む、さうして、天理（てんり）小合（こ）せむいぬ。勝敗（か）ハ、軍門（い）の習（な）ひ



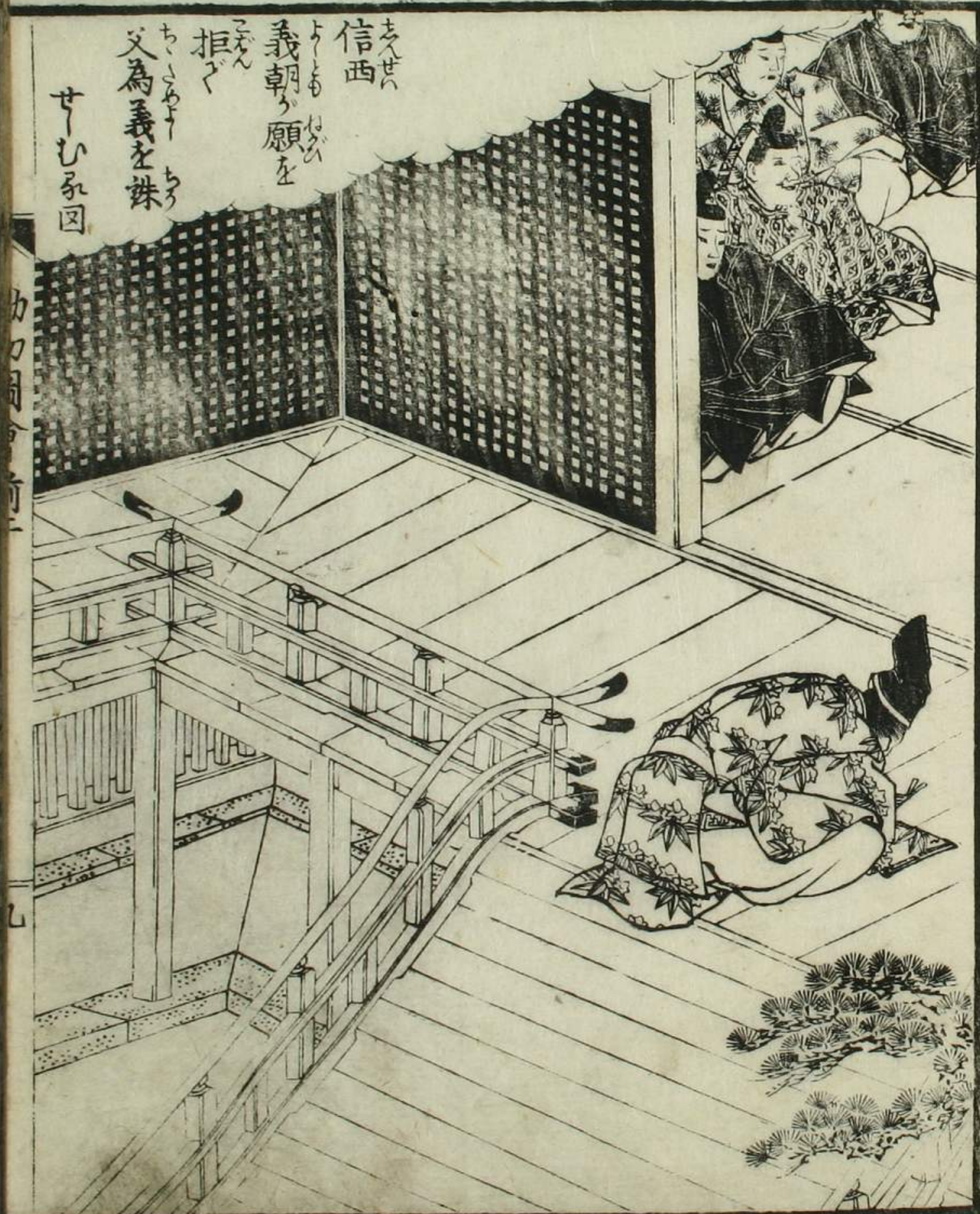


上りて。新院方大い仰天。さればこそ為朝の未前を察し、練中されたるか  
 のを。宇治殿うまへりて敵先を誣られしきと。周障狼狽大方ありす  
 太刀よりとて聞きたる。左府頼長公も今更後悔ありて、為朝が心を宥んと俄に  
 除月行ひて。為朝を藏入に任じたり。仰あれども。為朝ハ嘲哂ハ敵早寄来  
 つ。小諸方の手配ハせしむ。俄に除月を可笑きまじり。愚將を上りて  
 軍小勝。死利ありしやと。心中ハ瓜彈。耳小掛。戰場小弛。向ハ先一番小  
 安藝守清盛が勢を射ちたり。二番小兄義朝が勢を射退くる。其弓勢の厲  
 し。しと譬ふる小物。二箭小二人三人宛射付られしき。三軍鬼神の  
 小怖あり。されども義朝思慮を固し。白河御所の風上藤中納言家成々  
 の館小火を掛し。其火御所小燃移りたり。新院方終小防。使  
 かく惣敗軍となり。君ハ北白川より如意山へ落し。左府頼長公。路次  
 あり。流矢小中りて亡む。一軍勢己がまじり。落失たり。其中小廷尉為

義ハ始より此合戦利有すと。智覺せ。六戰場を不去討死せんとせり。成子  
 息即徒喜。推々練々。新院已小三井寺瓜。落させむ  
 へむ。再度諸國の勢を招。御合戦あり。必定なり。これ迄ハ耻を去り。存  
 命。強く坂本。落延。寺院小隠。世の動靜を合。院々  
 如意山中。御落飾あり。左府ハ流矢の為小亡命せし。の事。今々  
 維我頼。存命。為義已小自害せん。せしめ。成人。又推止。且  
 東國。下リ。左も右も謀を廻。是より又子七人別々。落行。為  
 義。重病を受。行歩。心小任せ。かた。唇岳の西塔。出家。録  
 小連。義朝。降人小出。是を傳。清盛。叔。又平馬助。忠政。も  
 淨土谷小隱居。為義降人小出る上。子息。西人を相伴。姪の清盛。小  
 就。降人小出。然。清盛。此度。一乱。付信。心中。思惟。我。重盛。小  
 諫言。小依。内裡。方。既。小軍。義朝。小仕。負。勲。功。を。奪。れ。り

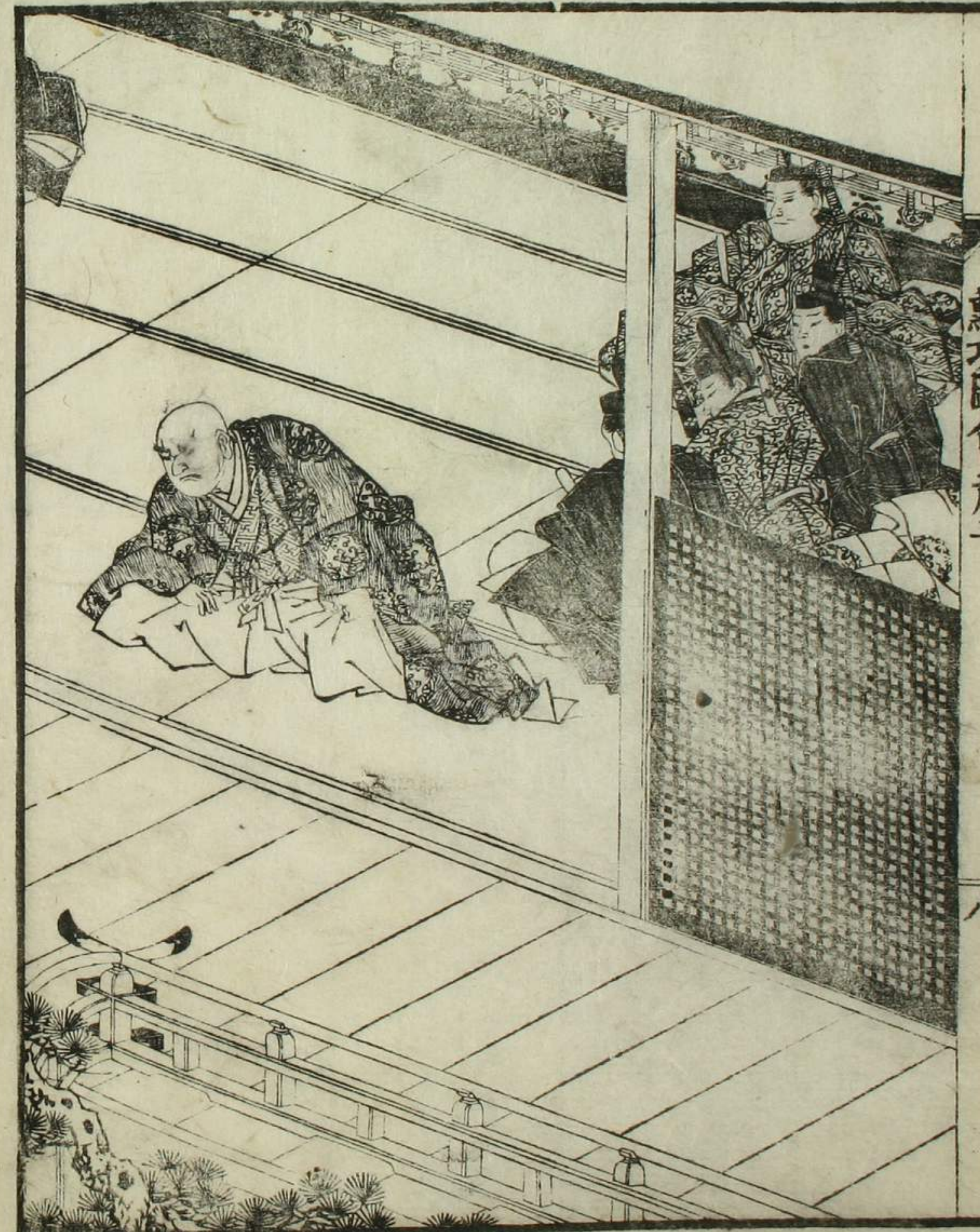
されども渠が又兄弟敵となり。己が為義降人か出る上、我一針を絶し渠が  
 又を討せ。猶も緒方、落失ふ源氏の類を尋ひ出さず。悉く誅す。義  
 朝を孤獨とす。遂に義朝をも亡し、平家一統の世と方々あり。深に謀計  
 を案じ出し。我妹婿、小納言信西と密結し。叔内表へ奉向し、奏し  
 今般新院、縋りて小隠謀を思立せしむ。御味方仕る武士なくん  
 ば、其事成す。源庭尉為義とす。某が叔父平馬助忠政、池部  
 御加祖、今よりより、自余の武士も院の御味方、悉く由りて大  
 事を引出し、然るに叛逆の名、院の蒙らせしむ。罪は如唇の武士小  
 ことい、然るに某が伯叔忠政、愚息四人と俱に降人か出ひぬ。然るに内縁  
 の私をりて、朝敵の大罪を、宥むじ。縋りて、何卒叔父忠政又子五人、某  
 小誅戮を仰付らるべしと願ひく。某、正忠に似しれども、原来清盛忠  
 政とも日来不和、中より己叔父を斬罪とせしむ。義朝も又を助す。道

かく己事を不得為義を斬罪とす。この謀なり。信西は、清盛と密意  
 を合せしむ。伴と大の感慨。緘し清盛の願ひを、契とす。急を願ひ  
 小任せられ。義朝も為義を斬罪とせしむ。勅旋り、悉く勸めしむ。  
 君実も、其旨義朝に命せし。清盛は願ひの趣を、勅免あふ。茲に義朝は  
 今般、拔郡の忠戦を、属し。乱逆を、戦し。平定し。其功、予く  
 又為義、おのひ兄弟の命を、助し。思慮を、回し。居る所、忽ち内裡  
 より、御使を、賜り。為義が首を、刎れ。勅、拔者、ゆ。我朝、大に、おのれ  
 躬内表へ、奉候。何卒、臣が、功、度、の、す、功、久、又、為、義、が、老、命、汝、者、怒、り、賜  
 り。い、と、両、度、を、敷、願、し。小納言信西、是を、遮り。清盛、既  
 小叔、又、忠政、又、子を、誅、せし。を、願、ひ、出、ぬ。伯叔、猶、又、小、等、御、邊、小、限、り、依  
 怖、御、汝、汰、有、す。只、速、小、為、義、が、首、を、刎、諸、方、拔、落、せ、子、供、せ、し。其  
 其、孫、を、尋、出、し。誅、戮、せ、し。と、嚴、令、を、下、し。義、朝、心、中、小、



去其  
 信西  
 義朝願を  
 拒ぐ  
 父為義を誅  
 せむる因

力の用命前二



惠乃圖會前二

八

深く信西を恨む悪くも當然の理小押無念ながら領掌し退出一  
 飯宅の後又小宣旨のかりむれを給り取期を勤められ為義女も悪  
 ひきど斯有んふ然るのみ知覚しれをこと戰場あり腹切しむの  
 本ありも自害せんといひる者ども強く降参を勸めし叶ふ  
 れを知らず女一渠ホガ心を休んと汝を頼り来はるなり疾々用意  
 ありしすされ多き義朝泣々鎌田次郎小命一朱雀野あり終小首なき  
 り此日清盛も叔父平馬助忠政其子新院藏人長盛二男自宮侍長忠  
 綱三男勾當正綱四男平九郎通政五人を六條川原あり斬罪し其後亦  
 義朝八重の宣下小カなく諸方一勢を遣し四郎頼賢掃部助頼仲  
 六郎為宗七郎為成九郎為仲ホを残らむと生捕船岡山あり五人も小  
 首を刻り都々今日保元元年七月十九日新院加祖の武士為義忠正を始りて七  
 十余人誅せられむとぞ淺猿うりたる

宗徳院於松山莊崩御條

去程小美福門院并小女納言信西ホ多年傾けをうんとかりし新院  
 一戦小チ負む御落飾有御室の宮のせむひ左府頼長公矢疵の  
 為小死亡し南都般若野の三昧小埋しるあり成歩悦ぶ大方あり  
 猶其虚実を糾せよと信西令し中原師信を官使し南都般若  
 野小行向ひ左府の墓を掘あむ世屍を引出し改く其終小チ捨させ  
 たり其奸毒の深たし瓜緒人泣吐しむと悪むる其後す帝城中感  
 御室小在と新院を瀨岐國松山乃莊に流しなりたる悼しうふの君  
 御在位乃昔と天の宥け聖主や上天小法り下地小則り万機百司の  
 政正し三綱五常の道明かれを五風十雨時を違へど萬民鼓腹し業  
 を樂し四乃海波静めし君臣樂をけり地主乃花咲春の日に室簾と  
 促し長閑日蔭小御宴を啓たし御詠吟の御遊濃小紅葉且散秋

の暮ふと大井の川に御幸なつて。竜頭鷓首の御船に管絃を催し舞文  
 の御會とらぐあく。しりも時をせむひり。美福門院の逸奏より。戎程を  
 く御位を下させむひ。御心をぞ風塵を日陰に弄ひ。花鳥を浮世の外小  
 尾をいふひく。御物おひの絶る時。晴ぬ泪の雨ふちるきむひり。さく  
 あふふ。今よと侍人の逸言を。龍迂の浪に漂ひむひ。汝の八百合あひ  
 暮し。保元元年八月十一日。つひに續及松山の莊に著せむひ。新島守とらむせ  
 む。斯く都の官人も皆取り。御前小傳を仕る者ともく。女房達三四人仕  
 丁二人の外も。四方の高た菜垣を築た。只一方の門を開た。日小兩度の供  
 御進くとも外に音信する者もあひ。び。ね。お。悒憤。荒木造の官もれむ  
 透間り。荒儀の風も物冷しく。千鳥鷓の啼色も。昼夜を分む。さえり。れ  
 む。昔を去のぶ御夢。ふ結をせむ。秋もよ。更行を後の山小木。ぼ。く  
 猿の声。ふ。懐旧の御膳を断せむ。竹離の下。小啼。う。を。出。る。音。り。も

御心細い。お増。え。来。生。者。必。滅。う。世。の。か。い。栄。枯。盛。衰。入。向。の。常。を。き  
 ども。斯。許。憂。い。の。身。小。重。る。前。世。の。業。因。の。あ。う。ひ。る。小。や。と。思。ふ。り。も  
 猶。後。世。の。苦。患。も。恐。く。せ。む。罪。障。消。滅。乃。為。小。も。と。く。五。部。の。大。乘。經。と  
 御。自。筆。小。書。字。い。む。ひ。我。身。を。扁。士。亡。卿。の。士。と。か。ら。し。も。手。跡。む。り。り。都  
 小。苗。ゆ。か。や。と。く。在。廳。高。遠。と。り。御。守。の。武。士。を。頼。り。せ。む。ひ。京。都。の。仁。和。寺。へ  
 登。り。せ。鳥。羽。の。安。樂。壽。院。乃。御。墓。小。納。と。た。り。び。や。せ。む。御。室。の。官。も  
 御。心。根。の。痛。く。し。小。関。白。忠。通。公。小。就。く。右。乃。昔。を。中。達。し。御。忠。道。公。も  
 哀。小。心。し。思。召。能。や。小。執。奏。有。く。る。ぬ。又。も。女。納。言。信。西。中。坊。け。く。八。近  
 傍。院。御。即。位。の。刻。より。再。度。天。下。我。智。を。や。と。御。隱。謀。を。思。せ。む。ひ。新  
 院。此。度。配。所。の。赴。た。む。ひ。初。く。御。幾。心。有。る。た。謂。り。察。と。る。小。是。女。當  
 今。を。呪。咀。し。む。恐。く。た。御。願。文。小。こ。を。い。つ。あ。決。く。都。近。く。ゆ。ち。せ。む。ひ。一  
 う。と。疾。を。濱。岐。反。させ。む。と。中。々。れ。た。帝。是。小。惑。され。む。入。即。時。小。高。士。送

リ及し假令手跡よりも都近辺小と叶ハざる旨下させ玉ふ。御室の宮も  
 カなく。其旨を御父お認められ御経小添く松山へ返させ玉ふ。新院其御父  
 を御覧し心もち瞋まする。御眸送り裂衣を握り都の方を睨はる。御父  
 の如た息を吐き宜く。朕適身の不徳を省懺悔滅罪乃為小も心堪を凝  
 しく書写せし経をも猶呪咀の邪文とて都乃近辺小も置し。や是皆女  
 院信西ホケ飽まき。朕を辱むるなりを如何をれを崇ホ斯まき。朕小は死  
 びや。此上今追乃道心を翻し三惡道小墜落し大土王と成。當今を  
 とも朕小雞面一女院信西又大威清盛其外憎しと身小族小同小物小を  
 と罵り玉ふ。御声も早猛々し。是より朝暮乃供御を断せ玉ふ。七日間御身  
 を清め御指を裂く血泣を絞り。大乘經の奥小兼了は。此玉ふ。御製  
 濱千鳥あはれ都小くく。身小松山乃ねふり。天地小  
 とし。御歌を血書し。御血泣をり。紙の告文を推し。天地小

祈く宜く。朕何の恨だも結むる。母後臣乃逆小依く王位を削られ度々  
 の辱瓜受刺。後生善所乃為小心力を盡せし。経を又都小留られ。今生  
 の恨骨小漬り肌小深く忍がれ。修羅乃上將と成。積小恨を報せ  
 ころを欲し。願く上。天帝釈下海。大竜玉。小朕が祈願を納受  
 し。件乃経し。告文を海底へ投入。天竜八部も合カし。より。不  
 や。俄然と浪送巻上り。烈々たる大焰燈出其中。一人乃天畜。現世。御経  
 并小御告文を把く海中。沈み。院此奇特を御覧し。祈願已り成就  
 せり。と。竟顔殊小。了。終小其後年月を配所の裡小崩さ  
 る。山中小華。脚凌を築た。脚廟殿小宮。其脚靈を宥られ。斯行乃事小。何と鎮り。死終神靈惡し。と思召る。草を悉く。七  
 盡し。其事迹。後乃條を。知玉ふ。



又久  
 新院  
 乃  
 松山乃  
 配所  
 大乗經  
 書寫  
 抄圖

無巧圖會前二

信賴義朝乱逆殺信西條

光陰の疾たし奔箭の如く流水小似る。保元も早三年となりたる。其年の八月十日後白河院御位成とせむ。皇子守仁親王小天下を譲らせむ。是を後小二條院とせむ。然るに瀧岐院の御宗小や浴中。小怪異の事多し。且又由りて兵乱出来り。其乱根を尋らふ。其頃権中納言兼中宮権大夫右衛門督藤原信賴とり人あり。祖先天津見屋根尊の苗裔中関白道隆公より八代の後胤播磨三位季隆の孫伊豫三位中隆の子なり。生得文小も疎く武小も疎く。猶も人小勝。只官君前小候。阿利。彼ひは。頼小朝恩を得。近衛司。藏人。頭。后官。官司。宰相。中將。府督。檢非違使。別當。が。ん。と。う。位。階。を。統。三。三。年。小。経。昇。中。納。言。右。衛。門。督。小。至。ま。り。一。乃。人。の。家。嫡。な。と。と。う。中。乃。昇。進。あ。ま。凡。人。か。り。ふ。例。と。ま。ご。あ。わ。ら。む。也。然。も。若。干。乃。所。領。を。賜。り。采。曜。心。乃。終。なり。と。れ。ど。

猶貪く飽てん。然ちとて家小絶く。久し大。臣。乃。大。將。を。望。ま。ば。上。皇。乃。御。意。小。由。任。せ。む。と。此。事。を。小。納。言。信。西。小。向。め。て。来。人。乃。智。才。富。貴。を。妬。む。信。西。日。未。信。頼。が。君。の。恩。電。を。得。無。能。ふ。官。位。昇。進。せ。る。を。腹。黒。小。か。り。の。希。々。乃。中。の。大。乃。小。か。ら。た。一。体。や。や。々。と。是。ハ。か。り。の。倫。言。哉。人。を。身。た。小。信。頼。か。り。大。將。小。か。り。と。維。り。大。將。を。望。ま。ば。ら。ん。抑。進。信。頼。乃。大。將。小。睿。智。俊。才。乃。人。を。擇。ぶ。を。授。め。ら。る。重。職。小。頑。愚。短。才。乃。信。頼。乃。此。職。を。汚。さ。し。弥。奢。移。橋。慢。増。長。一。果。と。君。を。狂。ん。ト。叛。逆。乃。と。成。企。世。成。乱。一。の。漢。乃。董。卓。が。例。を。す。慮。ら。せ。む。と。散。々。小。信。頼。が。こ。を。辨。傍。一。諫。拒。た。れ。ば。上。皇。も。理。と。思。召。さ。し。信。頼。が。願。を。其。依。小。置。せ。む。ひ。たり。然。る。小。此。事。信。頼。が。耳。小。介。を。躍。上。つ。大。小。怒。り。や。れ。悪。た。信。西。道。か。諛。言。乃。我。望。を。妨。る。と。ある。小。我。を。頑。愚。短。才。と。さ。し。臣。董。卓。小。比。一。々。乃。こ。と。安。く。ね。瀧。岐。院。乃。元。辻。多。し。一。由。原。六。渠。乃。逸。奏。乃。事。發。せ。り。元。



小由右中世の煩ひとかる庸儒者首捨切捨んものと是より隠謀の  
 ありひ歎小萌し時々味の人をうらみたるがさまたげた武士を頼まざる事成  
 就を多トとみひ維をう相結ぬれと考ふ平の清盛と一門の多く大國  
 數多領とれを軍勢も多るべけれども日來信西と入魂たれども一味とる  
 一尤馬頭義朝とを保えの亂小多一族朝敵とかり亡滅し其身家  
 とかり清盛が権勢小劣りしれ心安らむとどなりしめ不如義朝をう  
 らくふやと。是より何となく義朝小懇志を通じ折小觸時小臨種々  
 の贈物などし専ら其心を懐多るゆと。義朝もかり由あれは是を幸と  
 折々信頼が館付候し心隔ごり合り信頼仕と各たりとて一日閑  
 室中義朝と只二人酒宴をかり閑談の次小ヤク多。今朝廷の政勢と  
 んる小提録の家より出る御汝汰稀小専ら信西法師が計ひのこま  
 渠女し文学の才あるを慢ト上を蔑小下を軽し能を妬功と精

精中とれ人を残害とるる牧奉とる小違あどと去る保えの乱根も  
 渠美福門院し心を合し新院を飽まじ統し自御謀叛あせらる  
 ち小謀り遂小得道あり院を左遷しより糾配所中書字し  
 ひ大兼経を呪咀調伏し御願書かりと統奏し推戻しるゆと。院  
 も深く朝廷を恨ませひしと。且亦渠大貳清盛と内縁あれが密々心  
 を合せ源家を斃し平家小威権を副んと御辺が軍切小又の助命を  
 願ひし成中妨げ人も多た小子も御身の手をりて又を斬罪せし  
 ありて渠が深た奸計あり義朝とを現在の又を斬し不義不孝者と他  
 門とつを更たり一族小多忌疎させ御辺乃武威を落し自滅を招かせ  
 一の巧かりる毒悪の者を生むる朝廷を錯亂し下民の煩を引出し  
 登し君乃為世乃為彼賊法師が首を刎り笑つ根を断んを如何小し  
 ねむえ来義朝信西が奸悪を悪く清盛の出頭を憤る寂中たれを大悦ひ

某も彼賊法師が毒舌の為小又其の一族を毒殺し亡しハハ眼も骨髄も  
 漬り忘る。天晴調略を画され義朝御助刀仕の辱しとト々れ。信朝  
 喜悅の不堪夷物造の太刀一腰奥列駒の太く逞たを二足鏡鞍おれ義  
 朝小与へたり。是より五人日々赤會し高議し其虚を窺し大賊清盛  
 祈願の義有熊野(赤猪)くふより。信朝義朝究竟の時節至未せり  
 俄小軍勢を揃(平治)元年(保元)十二月九日(夜)子の射先三糸殿(押  
 寄)上皇を虜ふしをり。御所小大をけく焼立日(日)の世(日)朝小信西(宿  
 所)姉小路(西洞院)押寄。是も火をけ家中の男女悉く切殺しぬ。然る小信西  
 法師も天文易術小達しれ。其前後持仁堂小在る経を續誦し居る  
 小香乃火秘が経文乃文字三行焼し。是凡事かごとく庭前より出  
 天文を仰だんる小。兵革護り我身小災害おふ。危死凶兆頭出され大  
 小小せり。翌九日の朝南方(洛行)が。其夜都の方小あり。火光護り

くれも。され。妻妻起まり。右衛門尉成景とて者汝都返す。見  
 せむる小。成景夜(明)方小。馳馬小鞭を加。地坼り。大息吐く。信朝  
 義朝逆意を企院乃御所三糸殿を初。西洞院乃御省所をも焼す。小  
 ゆく告る小。信西大(小)孩(手)の舞足の踏を。余り小隠る。田原の  
 真(小)小(中)を深く掘潜し。天(命)道をも。遂小出(壘)前(司)光(安)が  
 小(小)搜し出され。首(小)列(小)らる。因(果)糾(小)る。繩(小)の。信西前(小)治(在)府  
 乃(墓)を掘(行)せ。報(小)ひ(心)ち(回)り(来)る。其身も(中)小(隠)し。堀(出)され。斬  
 断(小)る。不(側)たり。斯(小)く(信)頼(義)朝(小)の(依)小(動)止(當)今(小)押(大)  
 巨(小)の(大)將(を)兼(義)朝(小)の(播)大(國)を(賜)る。播(大)守(小)なり。其(余)の(後)も(小)小  
 應(小)下(官)位(昇)進(し)ぬ。是(皆)君(乃)睿(慮)より(出)る(處)なり。時(乃)勢(已)事  
 成(得)る(中)也。中(治)なり。小(免)せ(む)方(り)出(る)小(義)朝(乃)嫡(子)惡(源)太(義)平(乃)  
 東(國)三(浦)助(が)行(小)在(る)都(小)軍(有)と(せ)取(物)も(と)り(あ)む(地)より(小)





鳥羽會前二



討先せんと僅五十余騎を一隊とて六波羅に馳入千變万化し敵を討  
 ちて數を多くしつゝ清盛又子に出遇む味方も残さず討まれば再  
 度又と力を併し旗を上げて戰場を斬抜北國を落行多し斯く後平家  
 十分勝利を得至上を内裏へ還御せしむ法皇然も迎へ朝敵の張本  
 右衛門督信賴を大原より生捕六條河原より刑罪し猶も余黨を搜し  
 需ふこと厳く持小義朝又子を討つ欄らうと差出さるるが過分の賞  
 録をよぶると緒列觸渡りし時小義朝を主從僅小三十騎をりめて  
 東國へ落るる所々野武士山法師など小怖れ陸奥六郎義隆討れ太  
 丈進朝長も膝の口を射られ行歩心小任せれ有殺し兵衛佐頼朝伊吹  
 山の辺より敵小生捕せしむ義朝を僅小鷹津玄光淡谷金王丸鎌田の正  
 清三人小技られ美濃國より洛延從來の家人といひ鎌田小勇たれむと  
 野間の内海より長田庄司忠致が方へ行つ貯居し小忠致忽ち大欲心を

我れ重代の主君義朝を浴室の内より弑し現在の智より鎌田正清の  
 討取六波羅へ差出し鳴呼義朝より武名を天下小東せし小逆臣の  
 名を得非命の死を蒙るる偏小信賴し死の無道人小与力し聖主と  
 怨し且又為義を斬罪し悪報しとあられり

志内六郎忠死條

却鏡惡源太義平六波羅の戰場を切抜越前國足羽へ下り再度又義朝  
 と會合し旗を上り都へ攻上り先敗の耻辱を雪んとかり延小義朝を  
 長田が為小討し袍ととも或ハ討ま或ハ虜とせり安拳を握り牙  
 を咬恨氣天を衝き怒り憤り今ハ何を期とせ死都へ上り清盛重盛を  
 討つ恨を晴し其後長田又子が鬚首拾切つ仇を報せんと大膽不敵の只  
 一人足羽を立都へ忍び上り此所彼所小徘徊し清盛又子を租いり外  
 茲小義朝の即黨の内丹波國の任人志内六郎景任といふ者あり遠く外



旗の都ふ入る日を待御勢ふかりく犬馬の旁を盡しん所の存せし  
 争う三代相傳の主君を賣甲斐をた下即身小賞録を貪りいへ  
 妻る世のたひの恨やさばらし時た源家の棟梁さ頭殿  
 め公達ま余を落しぬ千軍萬馬も恐怖さ御身を二領の馬入  
 の従者をも連ぶる地小拔足し世を忍びぬ浅猿さよ壁の鬼畜木石  
 たりともなご痛いと見まさる此上と恐あふ事ふいぬ假ふ某が  
 家人の休小御身を扮装ぬ雨を窺ひ御本意を達しぬ甲斐  
 練はく酒飯を綱義平小勸めを義平も下即小似げを慌しぬ  
 志を感賞し飽まき小喫し終り此日より仕内が下人の休小扮装登る宿小  
 潜し夜ふ仕内後小徒六波羅へ入虚を窺へぬ私鳥も落る絆の  
 平家の権勢を中々清盛又子小咫尺とて能くと厠小伏搞下小潜  
 豫縁が艱昔も今も我身の上小おひく心を焦燥のをかりたり

仕内が尚時乃朋友小芦部弥藤次々々々難波次郎経遠組下の者有景  
 住ハ心隔む往通了男なるが心中小おひく頃日仕内小斬小下人を抱  
 下ハ度々も毎度我行小小隠ささせ一度も其下人小逢せさるど  
 研し々々彼ハ源氏小奉公せし者なれぬ古主の余類をどを下  
 人小仕立と貯小やし小賢も思慮を廻し仕内が隣家小隠さ居る垣  
 の透間より伺れ窺小折し中食の頃たりぬ仕内ハ弥藤次が窺  
 小あひ義平が上座小坐せし躬膳部を捧げ給仕をり休さか主  
 君を敬下りかれ弥藤次独笑し泉々我推量小違ふと尚も彼  
 下人の為休を借るる年齢世二二義平十九才をんゆ  
大兵あるるを面白く眼光り汝女と  
 賤しれたれども自然と勇者の機頭を相親堂々々威風凛々々々弥  
 藤次委く窺ひぬ暗小まき難波次郎が宿所へ馳行面謁し件の趣  
 此を遂小給へる経遠大小悦び曰察する小其者こそ十が九ツ義朝



の嫡男悪源太義平なり。やうも然し出らるる檢賞と後日汝汰と申す  
 即時小六波羅ありひた若部が辨松の條を言上し兵卒三百余人を領  
 しく彼弥とて次小引路させ。二條鳥丸なる仕内が方ごと押寄る。時平  
 平治二年三月十八日の酉の刻をうりたれ。高張數多點しはれ。仕内が宿の  
 八方を囲み経遠真魁小馬を進め大音お。此家の内小鎌倉の御曹子悪  
 源太義平の忍び御座し。辨人の者より慥小承り。雞波次郎御座小承  
 上仕まり。疾々御出あせられいと呼りたり。仕内六郎是を中々仰天  
 是ハ何者の辨人せやと周障しなご。漸々小具足小身を固めて義平  
 小向ひ君早く裏口より落させぬ。某當時防矢仕んと申されぬ。義平完  
 示しお笑ひ。志ハ健氣なれど。汝が防むとて何許も変りあはぬ。義平落し  
 と思ふ。百万騎が圍むとも蹴散らし通し。と拈野の草成雞拂より安  
 一。汝とて早く逃失し身を全うせよと申す。手早く小具足石切

より太刀抜挿し躍り出雷の如き声を發し推量の上包ふ。及むと見  
 ると源の義朝が嫡子源太義平なり。経遠ハ何処小ある。首をとつて日本一  
 の高名を顯せよと申す。向もあはれど。妾勢の中へ面もふと割し。縦横无  
 小切と申す。其太刀風の厲し死と電光石火の激とて。表小進し  
 止余人矢庭小切伏られぬ。其中小彼若部弥藤二も命を落せり。よりあは  
 辨人し。却り其身を亡し。とて世の物笑と成り。たり義平を猶と  
 経遠を討し。眼を賊し。飛鳥のし。切廻り。兵卒を討し。數多し。と  
 して。のさし。敵経遠と義平の饒勇小辟易し。逃廻りし。を終り。討取  
 得し。今ハ是れ。とて。玩小手をけ曳や。とて。ひさ。内り。と。屋根。剣上り  
 雞波を。と。め。ま。の。士。卒。是。を。忍。び。其。所。よ。彼。知。し。と。ま。回。き。ど。も。先。の。手  
 並小懲累し。維り屋根上り組通し。とて。か。者。も。な。り。唯。空。矢。射。り。許。て  
 義平棟續の屋根をを。剣越起超夜小後。と。行。清。も。あ。り。子。を。落。す。た

たり難波二郎大つ小の王を失ひ惆果あが防空射く在り仕内六郎を  
 衛ふ生捕り引させせとて六波羅へ送り斯く言上り重ての下知を  
 侍清盛立出り経遠が言を度席を拍り大つ小怒り汝妻勢を引率して  
 只一人の義平を討せしむと不覚多急た八方へ勢を指向同他くも義平  
 を生捕り生首把りまされしと殿し金どそれか経遠大つ小恐入再度  
 兵卒を手配し東へ栗田日岡西へ掛川丹波路北へ大原鞍馬南へ淀八幡宇治  
 木幡其外八方へ征兵をさし向尋ひ捜させしむ絶く行傍と知りたり扱  
 清盛の目日廳へ立出彼仕内六郎を白破へ引出させ咄と白眼ぐすされか  
 已當家の息録を喰かたり義平は匿居りハ予小仇せし下心をぬ是獅子心  
 中の毒虫小等た國賊をれが車裂小とふも飽くぬ奴をれどもと一  
 且の非を改め義平が隱家を明白小やさば罪科を免り以前よりと枝知  
 遣りか命惜む包り白状せよとある小景住此の臆せしと答るるは是の

仰くも見む。義平御曹子某が為小三代相傳の王君をり争う置置な  
 らざらん某當家小賤た奉公仕るも源家世小出む之とくは足休かり平  
 家の郎堂と且王小別まゝ再度責まらるるひ久知のひも源氏の  
 食録を喰ひし者某が下郎やむも命あつて限り心を妻むる所  
 存命臺のひも今暫く事露頭せしむる某手引し御身乃首と  
 王君小討せしむるものを微運ふり露り天也命也無益の刻を費さ  
 る乙より疾引出さし珠しむるを放てしむる清盛大つ小怒激し已匹  
 夫の今際をも省む我面前にも憚らむを究る非礼を吐くと奇怪か  
 是此上骨を挫ても白状させよと敦圍下更小命し獄下し昼夜と今  
 水大の呵責をり義平が行傍を責問せしむ仕内一言中世獲  
 と遂小獄中死しりり是を見聞人涙を流し惜る小景住其身源家  
 小仕へれも碌く小身なる小回恩を志すは義平を時刺しり小

幸に踏向ふも屈せど死し忠義の名を全うす。天晴下即稀る。健気者ふ感すぬ者もなかりたり。

悪源太義平伏誅條

難波次郎経遠と芦部が往進を定より。天晴悪源太を生捕莫大の高名を顕し。六波羅殿の檢賞小預らんとみりひりふ。義平の勇壮小辟易し。多くの兵士を損せしむるを當り敵を討池し。これを清盛が怒ふ。れ面目を失ひし。さあふ。日未経遠が出頭兵を胸悪くみりひ居る。輩後指をさし。経遠こそ王君の寛し。万緒我終自とこれ。二人の義平と捕し。三百余人の勇勢を卒し。向ひか。鈍くと逃飯り。可晒さ。寄合。辨笑ひ。これ。経遠大の腹を立。此上。如何も。義平を尋ひ。出。榻捕。耻辱を雪ぐん。武士道。さ。六波羅。願を出。洛中洛外。の寺社。糸緒。と。披露。究強。即黨。廿余人。肌。小具。足を堅め。せ。ら。

矢お物を被せ。前後をうせ。毎日。洛中洛外。の宮寺。小。緒心。ふ。天晴。義平。成生。捕せ。む。祈誓。樹林。敷。産。其。余人。の。隠。所。の。眼。を。賦。目。を。面。く。專。義平。が。行。法。を。尋。り。小。其。一。心。や。徴。一。心。亦。ハ。義平。が。運。や。盡。り。夕。二。日。例。の。即。黨。を。引。連。江。列。石。山。寺。糸。緒。一。丈。一。尺。の。明。神。緒。と。路。を。急。所。右。手。の。方。一。町。を。引。入。り。社。の。裡。より。雀。十。六。七。羽。を。ら。れ。強。く。ま。湖。の。方。秘。行。り。経。遠。能。目。を。付。其。方。を。守。り。即。黨。小。云。々。と。兵。書。小。飯。丁。連。を。乱。せ。其。野。必。と。敵。の。伏。兵。あり。と。し。る。本。文。あり。今。雀。の。起。る。何。も。心。得。ど。何。も。異。れ。者。の。隠。伏。小。て。い。ま。試。小。杜。の。中。遠。矢。を。射。込。く。尺。よ。と。下。知。と。是。即。黨。小。亦。例。の。産。忽。入。が。僻。月。く。空。矢。射。さ。と。る。り。と。口。の。裡。小。は。や。た。を。王。命。黙。止。ぐ。く。十。四。五。人。迫。々。と。進。り。立。並。ん。が。杜。の。内。を。目的。指。取。引。結。散。々。小。射。々。小。経。遠。が。案。小。違。と。悪。源。太。義。平。ハ。社。内。が。方。と。切。

拔しより所々お立ち思ひて夜毎六波羅の辺りを徘徊し注盛又子を狙ひ  
 にも其後と敵の用心弥厳し番卒以前小信し非常を教ふる厳重  
 なれども本意を達せしむる能く斯く急小狙ひし先野間の内海へも  
 越長田又子を討東國下り謀を回さんと都を去る當所すまり  
 多々浪々の身は悲しむ六波羅食を快くする能はざれも身心も小倦勞  
 き頻り小眠り萌し多ふより此杜の中へ今一睡の夢を結びたる小片ひ  
 ようと乱箭飛きたり寐へし身小五筋まで射付られ太刀拵り起る  
 小猶志むく敵箭射きたれども扱早敵小圍まれ多し思ひ今八是はとど  
 と矢筈を搜り捨例う石切を抜拵し躍り出雷うしたる声を怒り何奴  
 くれと名称くけど寐込を窺ひ遠矢小射多しとて義平が太刀の金味  
 とをぬしとて飛鳥のくく強きとて経遠刀をふり大に悦び扱こと日來  
 小義平殿よ近付てハ叶ハド只射取と指揮とる小即黨いもと義平と

亦く一驚を喫なり射残りたる矢成寧對雨の降し射不程小思源太  
 亦十四五筋の矢を射付られし猶是を物しめせ阿修羅王の怒  
 を頭し當る成幸ひ小切と落とて経遠が手乃者言成慄し是もなく敗  
 走と経遠大に怒り義平假令鬼神たりもあれ程矢疵負りしと何程  
 の更あゝと列色く生捕をれし身を操ぐ下知をふり即堂いも是  
 小属され得物を取ら八方より襲ひかゝる義平苦痛を忍び右小當り  
 左小亦亦七八人を斬り落さるされも其身金石りしを以て前矢疵  
 の上小又多く太刀疵を肩今腕痿眼暈敵の尸小躑ぐ兎之角小撞  
 倒るる処を難波が手乃者得たりと我先小落重り終小繩をを掛  
 々々経遠勇を悦び痛手の為小氣絶せし義平を馬小死をさせ探り  
 ぐ都へ飯り六波羅曳行ぐ庭上小あらし難波二即経遠今日石山の辺  
 ぐ天ノ鬼神と称し御曹子義平殿を生捕り泰と高と

呼り多り執奏の武士大いおぼろけに思は斯と言上りたれば清盛夢うと  
 許悦びはけ動死出く庭上を乃うお給ふくもかた悪源太朱お染く庭  
 小曳居らまきり。清盛近臣お命しと葉湯を我手小服さしめられむ忽  
 ら眼を開た四りを睨廻さふ。身八千筋の繩小搦らま六波羅の廳前の  
 白破小引居られれど。大い怒り齒咬をけしと繩取をさしと睨む。已ハ  
 我を誰しとかり源家の棟梁左馬頭義朝の嫡子とる者を。下即前小  
 白破引居る法やあふと詈りむとどまゆと。繩取大いおぼろけ四五人とりて  
 繩の端をとり曳居しとをふを。義平更しとせむと其者をもを曳摺みく  
 突然と歩く様側小近着振及く繩取を吃と睨む。繩取も身の毛豎  
 く怖く繩を放しと蹲りぬ。義平ハ其まう様側へ推上まむと座しあ  
 頃日飢渴の為小気力疲き。まも數十ヶ所痛手残肩なうと猶くる卒  
 動をなしむ六実小古今不側乃剛將とみと感ぜぬ者もなうり清とり

義平小向ひ。御辺の義朝が子たる中ちの殊小勇刀勝まう箭乃道小長せ  
 ましとぼし小言甲斐なく親兄弟小死せられ。此彼所身を潜く命を貯  
 ひ僅か糸経遠が手乃者小生捕ま縲紲の辱を請らうと近頃不覺  
 ぶとやし中れを義平大眼を睨と睨しと曰。御辺が戰場ちと逃隠る億病  
 小引しと人お然かりと思さしと不覺かれ。我源氏の家嫡と産れら前  
 を採り人小下らす。十五才ち大倉谷の戰場小無道の叔又義賢を討  
 るとより以来數度乃戰場一度も敵小背を見せむ。豈平家武士乃とく命  
 を惜く逃隠るべし。我惜く命を今日ま存命し。御辺又子と討く  
 又乃靈魂を慰しとかりが故かり。されども運拙く森に遠矢小射  
 らる生捕まきり。是天なり命かり。天小仰れ地小俯ても更小耻る処  
 去年御辺が熊野結乃下向を待結湯淺藤代辺小取圍く討り。安部野  
 埋伏しと討ちんと練し。信頼しと白痴漢酒色小溺まき。我練し頭



悪源太義平  
唐とかな  
大木清盛を  
罵辱す  
因

悪源太義平

二

れむとて御辺又子今日まぐ首然失せどり其時信頼小頼は我今  
 の身の上御辺又子か身の上有座し。平家乃者とも上下とも小勇の  
 ちく義もたぐ。増く武士の私を猶き。先小我仕内方小在。我何ぞ  
 三百余人も取囲か。何の仕出たる事もな。今日もま。尋常小名  
 うけ。雄雄を決せり。能く。森を窺ひ遠矢射伏す。勢のち  
 小漸生捕か。猶き。顔小義平を不覚呼りせ。片腹痛きよ所  
 給比真不義の御辺ホと射論して益なり。疾々殊戮を加はれ。此も恐  
 色なく嘲笑く。言及され。ま。清盛義平が利舌小言伏られ。言  
 成も及し得む。赤面か。経遠に向ひ。狂者小對し舌を旁と  
 おも無益なり。六條川原引出。斬罪。君小弓を掌。天珠の程と  
 世上小示し。令。突とま。へ。経遠承り。義平を興。素  
 六條川原伴ひ敷皮の上小た下。太刀取難波三郎経房太刀を抜。後

へ立回る小義平経房を顧みひ仰。是ま。源平の武士。殊戮  
 せ。れ。白昼小西山東山。切適川原。斬時。夜小入。ま  
 ま。義平程の者。白昼小川原。斬。清盛。武の情を知  
 さ。癡者。因果。車。雨。糾。似。今。人の身  
 上。明日。我身の上。平家の。遠。汝。我  
 言の空。我思ひ合。経房。由。我  
 の。諸人の。未練。甘。後生。為。寂  
 を。義平。亦。大。者  
 期。女。念。已。我首を斬。期。暗。心  
 鎮。仕。斬。喰。を。経房  
 日。御身如何。斬。首。人。喰。能。マ  
 と事。け。放。義平。怒。あり。や。喰。得。百  
 日

を過さすと雷神となりて曳裂捨ん。善斬よと喘と睨む。一眼  
をさすの怖くりたる。経房も髪取ると覺るれども心弱く叶いと太  
刀振上曳と呼掛声くも小首前小を落小く惜登一項羽樊會日勇  
を欺死孫子吳子智術を胸小隠せ。名將不幸微運や。六條河  
原の露と消ぬ。是併なり叔父義賢を討一惡報ととあれ。

義平靈抵殺難波三郎條

去程小平清盛と朝敵を亡一震襟を安し。なれ功大なり。君殊り  
感し思召。永曆元年正三位小叔一參議小拜。日二年右衛門督檢非違使  
別當權中納言小至り。續仁安元年内大臣小任。日二年小從二位太政大  
臣小昇進。と左右の大臣を經む。此位小至ると九條相國の外其先  
蹤。一刺兵杖を賜。輦車小兼官中出へ。を免さ。抑此太  
政大臣乃官と。八人皇三十九代天智天皇十年正月五日。大伴皇子始。

此官を免さ。一天の安危身小由萬機。理亂掌小あふ重職なれ。其量  
量備り。王佐の役才なり。ハ勅行なれ極官少。其棧小當る人多。時  
と此官小限。一則あが故小則。官も中なり。様の大官小昇。と  
宿世の福力の方と。処ふやと目をそむ。美淡すぬ人も。且清盛く官  
位昇進。一身の栄花を究。のを。守一族。三卿九卿小列。と其二云  
長男重盛。と内大臣。左大将小任。二男宗盛。中納言。右大将。三男知盛。と  
三位中將。重盛の男維盛。と四位少將。其外一門類葉の官位昇進。と  
あふ。追あふ。と就中清盛の二女徳子。八高倉院の中宮小立。あふ。斯の  
平家一家。の昌隆旭。の昇。一族の領。も。國三十七ヶ國。既日本  
乃平小過。と。され。清盛身の栄耀。小余。早。驕奢の心増長。と。王  
位を。輝。ト。國柄を。專。大小の政事。皆清盛。肺肝。より。出。さ。る。と。な。り。  
巴。心。小。合。と。切。な。れ。小。賞。を。加。心。小。違。と。忠。あ。ま。し。と。四。射。と。其。暴。逆。ひ



小仁安二年の春清盛五十一歳とりし  
 重た病小臥たれ一族の徒大平たつた諸医小命し医療手  
 盡せしも墓々しゆなるや久清盛心中小緒佛を念し疾病悉除の爲  
 小く俄小入道し名成淨海と改む此切徳もやまりの病癒忽小愈  
 再び壯建の身となりたり奇特を言ふる入道先非を改免王  
 法を崇め佛法小心を傾くぬた小さなかく豺狼の心益増長し奢移  
 月成越々長大小なり借かりひきく我今官位帝王小續た富貴心つ  
 かりとつたも太上老君が不死の法を得され終小も泉下の人となり  
 めささる百世小我佳名を残し小不如れとも人のな難たて成かさる  
 其詮を所詮今つ都成撰及福原小迂一萬代不易の帝城となま  
 心中小思うれ々まむ仁安二年七月撰及下り表ハ避暑の爲と披路一茲  
 彼所を巡見し々々小其年ハ残暑皓しりり々々まむと布引の滝の下小

酒宴を催し暑を避んと其旨命とふ小ど二門即從是とて小與あふ  
 游ふととくと我あくと供を願ふ其中小雞波三郎經房を先頃悪源太  
 義平の首を斬る折節と斬上悪く斬を雷とつたと孤殺んと仰せ  
 眼し世小怖し覺平日月前小残れと心くれどわりの居々か程ふる小  
 隨ひしうと忘まると小頃日夢の裡小義平甲冑つ姿中現ま経房と  
 白眼汝昔日我最刺小ひける釘を忘まると先年配所あふ崩  
 御あひ續岐院御願の今と修羅の上將となり緒の戸軍成と  
 司りも我も御眷属の雷神とわたり院曾と勅し小先小信頼心  
 を矯らせく信西又子を討せね頼と清盛が肺肝小合入く上皇と困  
 め今上小幸れ月見せなり終小ハ重盛が命縮免清盛を焼殺し重  
 か眼を報せし宣り先其手始小我汝を蹴殺し小んとやさる肉とりも  
 顔色次第小赤くなり眼の光星つと成る三郎身の毛髪も呼し叫

付るくこぬりて夢覺り。是よりよる夢中ありて義平の面影幻まぼろし如  
 く月前まへづか小遮り忘るく。能あたつて經房大の心を困こまりたる流石たけし弓箭ゆみやふ  
 身の友朋輩ともともふりて夢見り。結むす里得えむ潜ひそみ諸寺しよ諸社しよ祈願いのねを筆  
 死靈しりやうの祟まじを除のぞく念ねん死し加持かぢ祈禱きとうをのそり。されば今般こんぱん清盛せいせい布引ふひきの滝  
 遊覧ゆうらんの催もよほし供とも小従ちゆうへ。何なにとやう心こころふるをこれ病ひやう氣きと稱なづく。許退しよたい  
 一ひとつた日ひ來き經房けいぼうが莫逆まかつの友とも高梨たかなし十郎じちろうといふ者もの病ひやうを訪たづみ。て經房けいぼう  
 醉すいをんふ。更さら小所せう旁ぼうの体ていもんえされを訝あやり。向むかり。御ご邊へん疾しやく病びやう有あり  
 今般こんぱんの御ご供くを許ゆるし。中なかつさうふより。其その病ひやうを訪たづみ。て未ままふ。更さらり其その体  
 んえさる。何なにゆゑと。曰い。經房けいぼうをひとめ。足あし下したと我われと斷と金かねの友ともをれ。實まことを  
 告つふなり。穴あな賢けん人にんを結むすり。死しの實まこと。我われ病ひやう氣きあり。と。さうの夢ゆめを見みり。よ  
 里り心こころ何なにとなく。怖おそい。御ご方はうの身みあり。依より。身みを慎しんむ。存ぞん。あまむ。殘ざん念ねんなり。今  
 般こんぱんの御ご供くを許退しよたいせり。夢ゆめ中なかつの身みあり。預あづかり。結むする。高梨たかなしあり。是こは御ご邊

小似合こおひあさる。億いやく病びやう未ま練れんなる心こころふ。夢ゆめと原はら虚きよ無むより出でる。取とり。と。金剛こんごう般  
 若わく經きやう小せうも。如ごとく夢幻むげん泡影はうえいと。統とつ。又また。彈だん家けの穢けがれ。小せうも。癡ち人にん面めん前ぜん不可ふか統と夢ゆめと  
 も。習しゆり。夢ゆめ成なりり。吉きち凶きう禍わざはひ禍わざはひを繪えむ。婦めづ女子この惑まどひ。上うへ下した者ものの常じやう終しゆうなり  
 大丈夫だいしやうぶ何なにぞ。是こは成なり恐おそる。の理りあり。や。元もと來き思し夢ゆめと。心こころ小せうあり。う。成なり其その為ため吐  
 小夢こゆめと。又また。年とし月つきを超こへ。夢ゆめの。維いが身み小せうも有あり。他たの物ものの夢ゆめ小現せうる  
 小あ。と。心こころより種しゆの形かたちを生なむ。なり。御ご邊へん此こ事ことを深ふかく包つつむ。已すで小天  
 知ち地ち知ち御ご邊へんと。某たれと。知ち所しよ習しゆ四し知ちあれ。後あと日ひ小世せ小漏りる。經房けいぼうこそ一ひと夢ゆめと。恐おそれ  
 主君しゆきみの供とも小後ごま。と。汝なん太たせ。れ。多た年ねんの勇ゆう名な。時とき小滿まん億いやく病びやう未ま練れんの汚よご  
 名なを彼かり。門かど類るい屬じやくの面めん小泥でいと。畢ひつ竟しやう今般こんぱんの隨ずい從じゆうを。旌しやう與よを。六む辭じ退たい有  
 小由ゆ苦くる。と。義ぎもあ。と。敵てき徒と退たい治ちの。出で陣ちんなり。何なにせ。と。や。し  
 理りを推おし言ごを盡じんく。練れん多た。經房けいぼうも今いまを許ゆるす。道みちなく。心こころ中なかつの危あやふ。と。  
 ら。面めん小承じやう伏ふくの。色いろなく。曰い。穢けがれ。足あし下したの。練れん小あ。と。胸むねの雲霧うんぶ晴はり。

たふよくと綸しむりり。実我ながらとては夢小迷ひると愚なり  
 とく。遂小骨を定々高梨しり。清盛が面前(出所)平癒のり。披露  
 しく。隨逐の敷小を入りたる。去程小七月七日平相國清盛二門類葉を引  
 綉布引の瀑布の辺小宴席を設け。その妓婦白拍子小歌舞吹簫を奏さ  
 せ。美酒の泉を湛(佳者)の固を築た酒宴を促し。盃の献酬しり。なり。扱  
 人々稍酔小棄(頭)を揚(眺望)とる。名小あり。滝の水清く溜(張)り落  
 ふ。多さなから。數千端の白布を引(さ)り。なれ。布引と。宜も呼りし。步  
 奥。肌涼。た洞風小衣。汗をよ。滝の流。盃を浮。詩歌小思を  
 述。まもあ。腕押。足角。舐小笑ひ。真。と。あり。な。方小。是佳辰。令月。歡樂  
 極。萬歳。千秋。泉。未。手。も。媚。也。と。あ。さ。め。折。し。も。あ。れ。俄。然。と。く。一。采。の  
 陰。雲。滝。の上。小。湯。出。る。と。と。ん。え。さ。る。須。臾。小。黒。雲。一。天。小。満。つ。り。心。ら。四。方  
 大。黒。暗。と。なり。逆。風。吹。起。り。巨。木。を。倒。し。犬。雨。盆。を。傾。り。降。出。り。降。出。り。

谷震動とると比しく霹靂震ひ畏れ電光透間を。飛閃を。清盛が。め。一。門  
 の上下。真を醒。怖惑ひ。盃盤を収る。小。違。なり。周障。ふ。り。我。先。わ。と。逃  
 走。就中。難波。三。郎。と。殊。小。以。り。畏。後。た。れ。を。と。夢。の。ト。小。違。々。と。此。珍。事  
 小。遇。し。と。よ。さ。れ。神。力。勇。者。小。敵。せ。と。と。古。結。も。あり。譬。が。義。平。の。雷。雲。也  
 とも。是。幽。冥。の。一。鬼。の。武。徳。を。り。つ。當。む。な。ど。り。退。り。さ。し。心。小。心。を。房。一。太  
 刀。小。手。然。け。く。空。を。睨。眼。小。遮。る。者。あ。ふ。切。く。落。さ。し。を。身。構。る。志。と。鳴  
 呼。を。れ。も。争。う。雷。神。小。敵。と。た。忽。ち。般。若。石。を。も。破。り。く。墮。る。鳴。雷。と。ち  
 を。憐。む。登。一。經。房。の。五。躰。微。塵。小。碎。り。失。り。たり。然。る。小。雷。神。の。猶。清。盛。の。道。を  
 か。枕。と。殺。ん。と。や。一。團。の。交。流。星。の。一。追。蒐。一。清。盛。と。北。日。弘。法。大。師。自  
 筆。の。守。成。肌。小。挂。れ。を。其。徳。小。や。敢。う。雷。神。逆。付。し。能。く。空。一。虚。空。上  
 リ。たり。実。義。平。の。寂。期。の。一。句。空。一。く。と。經。房。を。枕。と。殺。り。たり。を。怖。り。たり  
 木曾義仲勳功圖會前篇卷之二畢

